



〒 399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4

TEL (0263)53-8802

FAX (0263)51-1290

E-mail : sogokyoiku-kikaku@pref.nagano.lg.jp

目次

「所長挨拶」	p.1
「研修講座について」「教職員研修会サポートについて」	p.2、3
「令和7年度調査研究レポートA」	p.4
「令和7年度調査研究レポートB」	p.6

所長挨拶

『学び続ける先生方のために』

長野県総合教育センター 所長 徳永 佳代

「磨かん共に」

これは総合教育センターの正面入口にある碑に刻まれている言葉です。「教育への熱意と探究心を持つ者がともに集い、学び合う場に」との願いが込められています。

令和4年12月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」では、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた改革の方向性として、子どもたちの学び(授業観・学習観)とともに、教師自身の学び(研修観)を転換し、新たな学びの姿(個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じた、主体的・対話的で深い学び)を実現することが示されました。

長野県では、教師の「新たな学びの姿」の実現に向けて、研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励の仕組みを構築し、研修の受講や受講履歴記録の作成を一元的に行うことができる「全国教員研修プラットフォーム『Plant』」の運用を始めています。先生方には、「長野県教員育成指標」等を踏まえ、これらを活用しながら、計画的な研修をお願いしたいと思います。

教師には、自分自身の教育観を常にアップデートしながら、子どもの主体的な学びに寄り添っていくことが求められており、そのためには、共に学び合う仲間や同僚の存在がとても大切となります。当センターにおきましても、今年度の事業目標を「『対話』から広がる新たな教師の学びの姿の実現～『磨かん共に』の理念を具現する学び合いを目指して～」とし、「対話」が充実するための工夫や方策を意識し、ともに学び合うことの価値を受講者同士が感じられる研修や、各校での校内研修や授業研究、各研究会活動などでご活用いただける魅力あふれるコンテンツの発信等を通して、先生方の主体的な学びを支援してまいります。

総合教育センターは、学び続ける先生方のためにあります。

センター研修にご期待いただくとともに、今後とも当センターの機能を大いにご活用いただきますよう、よろしく願い申し上げます。

研修講座について

研修の詳細は研修講座案内の該当ページ、またはPlantで研修概要をご覧ください。

◆Plantの操作で困ったら

Plant教員用マニュアル(長野県版)をご覧ください。Plant教員用マニュアル(長野県版)は、総合教育センターのホームページからダウンロードできます。



- 公立学校、信州大学附属学校園
 - Plantに登録されている教員
 - 研修申込みはこちら(外部リンク：全国教員研修プラットフォームPlant)
 - Plant教員用マニュアル(長野県版) (pdf) > 令和8年4月1日掲載
 - Plantに登録されていない教員
 - 研修申込みはこちら > (外部リンク：ながの電子申請サービス)
 - 2026 研修講座申込手引 (pdf) >

◆希望研修受講採否の確認

5月19日(火)の正午までに希望研修の採否をPlantにアップします。ご自身で必ず採否を確認してください。確認方法はPlant教員用マニュアル(長野県版)のp.17をご確認ください。「選考漏れ」と表示されているものは、受講が否決された状態です。当日来所いただいても受講できませんのでご注意ください。

Plantに登録されていない方は、5月18日(月)所属校宛てに発送する「受講決定者通知書」を確認してください。

◆研修に関する連絡等

研修について、集合場所や持ち物の詳細等追加の連絡がある場合は、Plantを通じてお知らせいたします。Plantに登録されていない方は、総合教育センターのホームページに追加連絡を掲載しますので、研修開始日前に必ずご確認ください。



過去の講座情報はこちら>

4月の研修講座				
講座日	講座番号	講座名	実施形態	申込時期
14日	1-1-01-01	初任者研修 全県セッション1	対面	
21日	1-1-02-01	初任者研修 基礎基礎研修1	対面	
28日	1-1-02-02	初任者研修 教科指導基礎研修1	対面	
28日	1-1-01-31	初任者研修 全県セッション(オンライン)	オンライン	

5月の研修講座				
講座日	講座番号	講座名	実施形態	申込時期
12日	1-1-02-03	初任者研修 生徒指導基礎研修1	対面	
14日	1-3-01-01	キャリアアップ研修Ⅱ 全県セッション1A (準備・中級)	対面	

◆研修講座のふりかえり

研修講座のふりかえりはPlantで行います。インターネットに接続可能な、ふりかえり入力用の端末をおもちください。持ち物でPC等指定されていない場合、スマートフォンでも構いません。

Plantに登録されていない方は、別の入力フォームや記入用紙を用意いたします。

◆メールアドレスの登録について

Plantにはメールアドレスが2つ登録できます。メールアドレス1に公務用メールアドレスを登録している方は、メールアドレス2に個人用(スマートフォン等で受信できるアドレス)を登録しておくことで当センターの研修後ふりかえり等入力する際にお使いいただけます。

※市町村等を越えて異動し、前の公務用アドレスが受信できなくなった場合でも、メールアドレス2に個人用アドレスを登録しておくことで、異動後もPlantにログインし、メールアドレス1をご自身で変更することができます。

◆追加募集について(研修講座案内p.5 (4))

5月20日(水)以降、追加募集を随時受け付けます。各講座の実施日の10日前までに申し込んでください。定員に達した場合は募集を締め切りますので、ご希望がある場合は早めに申込みをお願いします。

<受講決定後のお願い>

- ・実施日の一週間前までに、研修講座案内に記載されている内容を再度確認し、受講の準備をしてください。
- ・やむを得ない事由等で研修を欠席または遅刻や早退する場合、所属長もしくは管理職が電話連絡をした後、欠席、遅刻、早退に係る電子申請を行ってください。(研修講座案内p.82)

連絡先:【指定研修】0263-53-8804(教職教育部) 【希望研修】0263-53-8802(企画調査部)

昼食の持参をお願いします！

- ・食堂は現在営業しておりません。必要な場合は、各自必ず昼食を持参してください。
- ・昼食は各研修室及び食堂やラウンジでとることができます。ごみの持ち帰りにご協力ください。



先生方一人一人の学びを同僚みんなの学びへつなげる

教職員研修会サポート



センター受講者がその講座で学んだことを手がかりに、校内研修を通して、職場の先生方と、お互いの「授業観」や「子ども観」を交流する機会をつくりませんか。センター専門主事がそんな関係づくり、組織づくりにつながる校内研修運営をお手伝いします。



センターでの
学びをもとに
総合教育センター

「対話」をもとにしたセンター研修の一部を
受講した先生が同じように校内研修で実施する

センター主事のサポート内容

- ◆「対話」をベースにした校内研修会を一緒に構想
- ◆研修講座で使用したシートや資料をそのまま準備、活用
- ◆依頼時間に合わせたタイムテーブル(進行計画)の提案
- ◆当日は学校訪問しICTの活用フォローやファシリテート等のフォローにあたる
- ◆オンラインでの実施希望にも対応



校内研修で
同僚と対話
学校

どの講座でもサポートを受けることができます。

(一部サポートが難しい内容もありますのでご相談ください。)

「教科学習の中でもできる探究的な学びについて学んでいきたい」(令和7年度研修講座『探究の学び』を探究する)受講生の自己課題より一部抜粋)などの先生方の声を受け、右の計画で教科における探究的な学びの授業づくりに関する調査研究を行いました。

①中学校の教科学習の視察

視察先：栄村立栄中学校
視察日：令和7年9月9日(火)
視察授業：国語、美術

栄中学校 教育理念
「自学共育」
令和7年度教育目標
「自ら学びを創造する生徒」

②先生方との懇談とアンケート

左の調査研究のまとめは、栄中学校の視察から示唆された、教科における探究的な学びの授業づくりで大切にしたいことです。

以下に、その概要を紹介します。

調査研究のまとめ

- 生徒の主体性を把握して単元を構想すること
- 意図して解決の視点や追究の方法を提示すること

視察した国語の授業「ヒューマノイド」(2学年)

【育成を目指す資質・能力】

目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈する。

【本時(全7時間中の第3時)の活動】

本文から伏線を見つけ、回収されている場面を対応させて整理し、その効果を考える。

(情報の収集/整理・分析/まとめ・表現)

生徒の主体性を把握して単元を構想すること

生徒の主体性を把握して単元構想

生徒が何を自己決定して追究し続けることができそうかを考える

本時、伏線回収の場面を図に整理していた生徒たちは、「友だちの考えを見たい人は見ていいよ。」とK先生の声がけを受けても、個人で試行

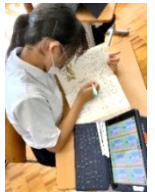


図1

錯誤しながら図に整理し続けました(図1)。授業終末にH生は、「意識してみると様々な伏線が張られていて気付くとおもしろいなと思いました。」と振り返りました。このようにH生が個人で追究を続けて伏線のおもしろさに気付き始めた背景には、K先生が生徒の主体性を把握した単元構想がありました。

K先生は、本単元において生徒が何を自己決定できそうか検討し、学習問題やその解決のための学習内容は与えることにしました(図2)。一方で、授業後のK先生との懇談では、「生徒が学習問題などを自己決定する学習にもチャレンジしたかった。」といった話がありました。そこで、学びの構造を明らかにするため、学習者が何を自己決定するのかという視点で整理した図3に本単元を当てはめてみます。すると、本単元は、学習問題(①課題)やその解決のための学習内容(②手続き)はどちらも教師から与えられ、生徒に③成果を委ねたパターン2となります。つまり、本単元は、探究的な学びのパターンの一つであり、探究的な学びを充実させていくために必要な学びであると言えます。

しかしながら、K先生の声がけを受けても最後まで個人追究を続ける主体性を発揮していた本時の生徒の様子からは、K先生の話にもあったように、生徒が学習内容(②手続き)を自己決定するパターン3の単元を構想することもできたと思われます。その場合、生徒は、本時の先生から与えられた整理する活動ではなく、例えば、過

去に学習した伏線が張られている文学作品を基に物語の面白さに迫る活動に取り組むことを自己決定していたかもしれません。つまり、単元を構想する際、生徒が何を自己決定して追究し続けることができそうかという主体性の把握は、生徒の探究的な学びを充実させるために大切なことと言えます。

教師から与えられた
単元を貫く学習問題
「伏線に気付くと、物語にどんな面白さが見えてくるのか?」

教師から与えられた
本時の学習内容
生徒が見つけた伏線について、どの場面で回収されているかを対応させて整理し、効果を考える

図2

	①課題	②手続き	③成果
パターン4			探究
パターン3	✓		探究的な学び (各教科におけるいわゆる パフォーマンス課題を含む)
パターン2	✓	✓	
パターン1	✓	✓	✓

(※)イメージ中の「✓」は、教師からどの範囲の情報が与えられているかを表している。
(※)出典元において、パターン1～4はそれぞれ、「確認のための探究(confirming inquiry)」、「構造化された探究(structured inquiry)」、「指導された探究(guided inquiry)」、「オープンな探究(open inquiry)」と表されている。
(出典) Banchi & Bell (2008)、白井俊「世界の教育はどこへ向かうか 能力・探究・ウェルビーイング」をもとに作成

図3 学習者の裁量に着目した「探究的な学び」の整理(イメージ) ※赤枠と太矢印は筆者加筆

出典：文部科学省教育課程部会 生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ(第3回) 資料1(令和7年12月26日)

意図して解決の視点や追究の方法を提示すること

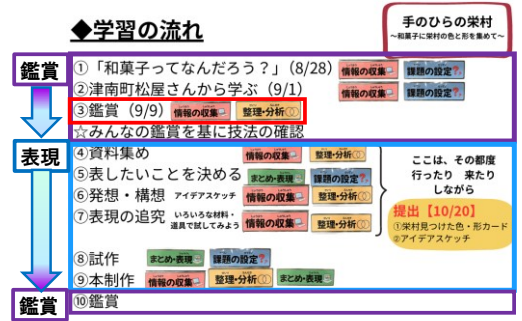
視察した美術の授業「手のひらの栄村～和菓子に栄村の色と形を集めて～」(2学年)

【本時に育成を目指す資質・能力】

和菓子の目的や機能との調和のとれた洗練された美しさを感じ取り、職人の表現の意図と創造的な工夫について考え、美意識を高め、見方や感じ方を深める。

【題材展開の中の本時の位置付け】

本題材は、粘土での和菓子づくりを通して栄村の魅力を表現する活動です。導入の鑑賞の活動では、「和菓子って何だろう?」という課題を設定し、職人の思いや技法などについて情報の収集、整理・分析を行います。この鑑賞の第3時にあたる本時は、後の表現の活動で、生徒が主題や表現の見通しをもつことに効果的につながるように意図して位置付けています。



【整理】する視点を示す

和菓子から伝わることを感じ取るための視点「色」「形」「道具」「技」を示す導入

K生は、「へらを縦や横に動かしてかごの模様を表した」と答えます。先生は、前時の色と形に加えて、「道具」や「技」にも目を向けて鑑賞するように促しました。



図5 鑑賞した和菓子①

図5の和菓子を鑑賞したN生は、十五夜をイメージします。そして、先生からの「これは何だと思っ?」と今まで注目していなかった部分(a)に目を向けるように問われたN生は、「星」を連想します。続いて、「金箔を使っている」と技や材料の工夫にも見方が広がっていきます。N生がこのような色や形以外にも見方を広げられたのは、導入で先生が和菓子から伝わることを感じ取るための視点を示したからであると考えられます。

【整理・分析】の視点を焦点化する 造形的な見方・考え方を働かせながら鑑賞できるように、感じたことの根拠を問いかける



図6 和菓子①を鑑賞している様子

また、K生は、「月に帰っていく感じがする」とイメージを広げていきました(図6)。そこで、「どうして帰るように感じたの?」と先生から問われたK生は、「ウサギの体が月に向かってるように見えるから」と答えます。このやり取りから、感じたことの根拠を先生が意図的に問いかけたことで、ウサギの月に向かう動きを伴った形とウサギが月に帰っていくイメージが、K生の中で自覚的に結び付いた様子が見えてきます。K生がこのような造形的な見方・考え方を働かせて鑑賞することに至ったのは、整理・分析のプロセスで先生が感じたことの根拠を生徒に問いかけ、視点を動きに焦点化しているからであると考えられます。

【分析】の方法を示す

和菓子から伝わることを感じ取るための方法を示す導入や環境設定

図7の和菓子を鑑賞したO生は、別の和菓子と比較して「満月の夜」という作品名を考えました。その後、「まっすぐな線が霧っぽい」という異なる友の意見を受けたことで、タブレットの画面に目を移し、「かすんでいる感じ」などの他の友の意見も参照しながら作品名を分析していきました。最終的にO生は、栄村の冬の夜のきれいさを想起して「朧月」という作品名を考えました。その背景には、導入時、和菓子を比較するなどの様々な分析の方法を示す先生の支援や、友の考えをいつでも参照できるICTを活用した環境設定の準備がありました。



図7 鑑賞した和菓子②

最後に 栄中学校の先生向けアンケートでは、「時数が少ない中でじっくり探究的な学びに取り組んでいくことが難しそうだ。」という回答がありました。一方で、「生徒が興味をもったことを自分から調べてまとめる姿が見られるようになった。」「できないことを隠さず仲間と相談したり、自分で調べたりすることが増えた。」など、教科における探究的な学びを積み重ねていく中で生徒の成長を感じている回答もありました。

栄中学校の実践のように、生徒に委ねる場面や教師の指導性を発揮する場面を検討しながら授業を積み重ねていくことで、生徒は、自ら学ぶ方法などを身に付け、探究的な学びを充実させていくことにつながっていくと期待できそうです。

はじめに

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の具体をもっと知りたい」という先生方からの声を受け、本調査研究を行いました。

県内の山間地にある小規模校の上田市立菅平中学校と、都心にある私立の中高一貫校であるドルトン東京学園中等部高等部の視察を通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の具体を示すとともに、授業づくりと学校づくりの視点から考察を行います。

上田市立菅平中学校の授業づくり

上田市立菅平中学校では、目指す生徒の姿の1つを「自ら学ぶ子」としています。その具現に向けた取組の一つとして単元内自由進度学習に取り組んでいます。

生徒の学びの姿 (中学3年 数学)

授業が始まると、Aさんは学習計画表を確認し、自分で決めた学習カードに取り組みました。教科書をじっくり読んだり、端末でヒントを繰り返し見たりして、自分の学びを進めていきました(図1)。途中、 $8\sqrt{12}$ をどのように変形するかわからなくなったAさんは、教師に声をかけました。そして、教師によって示された端末上のヒントから、過去の学習を振り返ることで答えを導き出していきました。



図1 自分のペースで学ぶAさん



図2 友とやり取りしながら学ぶBさん

また、Bさんは、友に「ここって、どういうこと?」と声をかけ、自分の疑問点についてやり取りしながら学ぶ姿がありました(図2)。

生徒たちは、学習計画表を確認し、教科書だけでなく、教師が作った学習カードや端末上のヒント、解説・解答(図3)などを用いて、自分のペースで学んでいました。この姿は、何を手掛かりとするか、だれと学ぶか、どんなペースで進めるか等を自己決定する機会が保証され、生徒自身が学習を調整しながら取り組んでいたために現れたと考えられます。さらに、授業後も友にわからないところを質問する姿もありました。これは、学びの意欲が高まっていると同時に、安心して質問し合える関係が築かれていることにより、現れたものでしょう。



図3

また、教師は、すぐに答えを教えるのではなく、過去の学習を振り返るように促すなど、生徒とやり取りしながら、学びを支える役割を務めていました。

ドルトン東京学園中等部高等部の授業づくり

ドルトン東京学園中等部高等部は2019年に開校された私立の中高一貫校です。ドルトンプランの「自由」と「協働」の理念を基に、「①主体的に学び、探究・挑戦し続ける生徒 ②多様性を理解し、他者と協働する生徒 ③自らの意思で積極的に新しい価値を創造し、広く社会に貢献する生徒」の育成を目指しています。授業では、教師から提示される学習の手引きを基にして、生徒自身が単元の学習計画を立てて学んでいます。

生徒の学びの姿 (中学1年 美術)

美術の授業では、「21×21×21の芸術～線をつなげて複雑な立体をつくる～」の課題に取り組んでいました。Cさんは、プリントに描きだしたデザインを基に、切った木材のパーツを重ね、試行錯誤しながら制作をしていました。隣のDさんは、別の形の作品を制作していましたが、2人は時折、声をかけ合い、作品の意図を説明するとともに、アドバイスをし合っていました(図4)。



図4

生徒たちは、思い思いに異なる形の立体を制作していましたが、互いの制作に関心を持ち、意図を伝え合う中で、言語化することによりメタ認知が高まったり、友の工夫を聞くことで新しい発見に繋がったりして、教室では活発にやりとりが行われていました。また、学習について尋ねると、生徒は課題の内容や自分の作品について詳しく説明することができていました。この姿は、学習の手引きを基にして、その題材でどんな力をつけるのか等を教師と生徒で共通理解していたからだと考えられます。さらに、この学習の手引きには、「プレゼンテーションで作品の意図や工夫を説明する」という課題も書かれており、協働的に学べるように、生徒がアウトプットする場面を教師が意図的に位置づけていました。

生徒の学びの姿（中学1年 数学）

Eさんは、テスト後の自己調整の時間（個々に委ねられた学習の時間）に、自分で選んだ苦手な問題に取り組んでいました。一方Fさんは、先取り学習で中学2年生の問題に取り組んでいました。Eさんは、解き進められなくなったとき、Fさんに声をかけ、「ここってどうやるの?」と尋ねました。Fさんは、Eさんに対して説明をしながら、ポイントとなる場面では、Eさんに「つまりどういうことだと思う?」（図5）と問いかけ、Eさんが理解しているかどうかを確認していました。



図5

2人は、自分の学びに立ち返ったり自分の学びたいことにさらに取り組んだりしていました。この姿は、「自分で学びを進める時間」や「自由に自分の学びを進めることができる時間」があることに加え、自身で学習計画を立てる学びを通して、学習を自己調整する力が育成されているからこそ見られたのではないのでしょうか。

ドルトン東京学園では、前述した①～③の具現に向けて、特色ある教育課程が編成されています。授業や学校生活のあらゆる場面で、生徒、教職員、そして保護者が、活動や対話を通して大切にしたい理念を共有しています。ドルトン東京学園の生徒の姿は、このような取組によって支えられていると考えられます。

菅平中学校、ドルトン東京学園では以下のように、授業づくり・学校づくりに取り組んでいます。



菅平中学校の授業づくり・学校づくり

- ・自己決定や自己調整を大切にし、単元内自由進度学習等、自分で計画し実践しながら自分のスタイルを見つける授業づくり。
- ・生徒理解を根底に据え、「何のために取り組むのか」を明確にした授業づくり。
- ・地域の実態から課題を見だし、探究的に取り組む総合的な学習の時間の実施。
- ・全校や連学年による道徳、全校朝学活等、多様な他者と学び合う機会を設け、全職員でサポートする。
- ・スキー科、英会話科などの地域の特色を生かした教育課程。



ドルトン東京学園の授業づくり・学校づくり

- ・生徒が自分で計画を立てて取り組む授業を、年間を通して実施。
- ・生徒が見通しをもって学ぶことができるように、教師は学習計画立案の助言をしたり、必要な環境を整えたりする等、間接的な支援を行う。
- ・学校生活におけるルールではなく、生徒が自分で判断し行動する。
- ・1授業時間を45分として、探究や自己調整の時間を生み出す教育課程。
- ・上級生から学ぶことを大切にしたい、異学年での探究の時間や、縦割り学年による生活集団を組織。

学校規模や立地環境が異なる2校ですが、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の視点からは、以下のような点が示唆されました。

菅平中学校とドルトン東京学園の取組から示唆されること

①計画性と主体性を伸ばす授業づくり

- ・生徒自身が計画を立て、自分に合った方法を決めて見通しをもって取り組む。
- ・自分の学びを調整しながら進めることで個別最適な学びを実現する。

②他者との協働や学校の特色を生かした教育課程の編成

- ・異学年をはじめ、多様な他者と協働的に学ぶ場面を教育課程に意図的に位置付ける。
- ・地域の特色や生徒の関心に基づいた学習を通して、社会の課題の解決につながる資質・能力を育成する。

③生徒の学びを支える教師の在り方

- ・目指す生徒の姿を共有し、生徒理解を基に、生徒の学びをサポートする。

おわりに

「学び」の主語は子供自身であり、自らの学習が最適となるよう子供自身が調整していくことが求められています。多様な個性や特性を有する子供が顕在化する中、学校の「当たり前」を見直す時期が来ていると言われていています。資質・能力の育成と共に、その生徒の姿を具現するために、どのような教育課程を編成するかという視点も入れながら、各校の特色を生かした授業づくりが大切なのではないのでしょうか。

自校の特色や強みを生かして、できることからまず一歩踏み出し、これまでの授業づくりや学校づくりを更新していきましょう。